
僕の日常

sold out

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の日常

【Nコード】

N8986Z

【作者名】

s o l d o u t

【あらすじ】

主人公を中心に様々な人の心情が変化していく。

題名通り主人公の日常が綴られています。中には非日常もあったりします。

プロローグ（前書き）

前書きとか多いとイライラすると思うので少なくともしようと思います。

プロローグ

「ねえねえ、なまえなんていうの？」

「——だよ」

「いっしょにあそぼうよ」

「そうだね。いっしょにあそぼう」

「お母さん——ちゃんとあそぶからまってね」

「ふふ、気を付けるのよ」暖かい眼差しで息子を送り出す。

「——ちゃん。上にカブトムシいるよ」

「とってちょうだい」自分から声をかけたのにその言葉を無下に
はできないので少年は

「待っててね。すぐとってくるから」少女に頑張ってねと言われ、
少し照れるが表情に出さないようにしているが出ている。

そして木を登りきり下を見ると急に怖くなりお母さんと呼ぶ。

「お母さん。こわいよ。たすけて」声がとても震えているのと同じ
に足も震えていた。

「大丈夫。だってあなたは——」

第一章／入学初日 #1

「……て…さい」

「起きてください」

寝ぼけた目を半分開く。するとそこには、きれいな顔をした美少女が僕の体を揺すっていた。

「学校に行く時間ですよ。そろそろ起きて準備してください」何回も起こされているので仕方なく起きて

「わかったよ。今から着替えるから出ていってくれないか？」ベツドから立ち上がりズボンに手をかけると少し顔を赤くしながら部屋を出ていく。

そして、着替えが終わり顔を洗いリビングへ行く。

「朝ご飯が出来ているので早く食べてくださいね」テーブルの上には色とりどりのサラダと食パン、ブラックコーヒーがあった。

「ありがとう。いつも言ってるけど透華、別に毎朝作らなくてもいいんだぞ」毎回言っていることを今日も伝える。少し悲しそうな、寂しそうな顔をしてから

「気にしないでください。お母さんにもよろしくと言われているので」

「ああ…母さんがね…」僕の母は、生物学者の研究者で今はアフリカで象の生態調査なんかをしている。ちなみに父も同じ生物学者の研究者で今は北極でホッキョクグマの生態調査をしに行っているのだ。

「とりあえず早く食べちゃってくださいね」そう言うと僕が食べ終えるまでテレビを見ていた。食事を終わると透華に声をかける。その後家に鍵をかけ、学校へと向かう。

僕たちの通う学校の名前は私立来龍学園である。

来龍学園は生徒人数約900人の大規模な学校であり、またここら一帯では、学力、スポーツ共にトップレベルの学園であった。

第一章　入学初日　#2

「おつ。朝から夫婦で登校かい？お熱いね」このかる口を叩いているのは僕の親友、山中司である。

「おい龍人。俺に透華ちゃんちょーだい」とても自己紹介が遅れたが、この物語の主人公？の僕の名前は倉木龍人だ。

「嫌だね。というか聞く人を間違つてないかい？」なあといいながら隣を見る。

「そ、そうだよ。それにもう私は龍人君のものだもん」さらりと爆弾発言をする一拍おき

「冗、冗談だよ。そんな目で見ないでよ」嬉しそうな、悲しそうなどちらとも言えない顔をしながら僕と司を見る。

こんな空気のまま暫く歩いていると同じ制服を着た女の子がキョロキョロしていた。

「あれ、何だろう？待ち人探し？」

司はおもちゃを見つけたような顔をしている。

「いや、違うんじゃないかな。なんか道に迷ってるみたいだよ？どうする龍人君？」

「一回素通りしてみよう」2人はえっ？という顔をしていたが龍人の指示にしたがった。

そしてそのまま素通りしようとする案の定声をかけられた。

「あのゝ。すみません。来龍学園にはどのように行けばいいんでしょうか？」やはり道迷っていたようだ。

「これから僕たちも来龍学園へ行くので一緒にどうですか？」努めて明るく話すと先程までの緊張の面持ちとは別に柔らかな顔をしていた。

「あ、ありがとうございます。えと、わ、私の名前は鉄 優子です。よろしく願います。」

「ん？鉄？つてもしかしてあの有名企業の？」そんなはずないよなと思いながら恐る恐る司が聞くと

「はい、そうです。社長の娘です。」

「えゝゝゝゝ」本当に驚いていた。あいつを除き。

「ほらほらあとちょっとでつくよ。」名前がどうしたといった様子の龍人の一言で改めて前を向く。

そして僕たちは来龍学園の門をくぐる。

第一章　入学初日　#3

そして4人は玄関に貼られているクラスの割り当て表を見に行く。

「あつ。私たちみんなC組だよ」内心ほっとしていた。クラスに知り合いが一人も居なかったらと考えるだけで龍人は身震いしていた。その後、僕たちは1-Cへ行き、黒板に貼られている席順につく。1クラス40人で1学年10クラスあるのである。

席順は龍人が2列目の透華が3列目の後ろから2番で、龍人の後ろに優子。

そして司は窓側の前から3番目であった。

クラスに全員が入るとちょうどチャイムが鳴り、担任が入ってくる。

「ほらーみんな席に着け。えーと、俺の名前は佐々木晃治だ。自己紹介等もあるがまずは入学式だ。名簿順に廊下に並べ」その担任の一言でクラスのみんなが廊下に並び、面倒くさいなどの声も聞こえるがそれは誰もが思っていることだ。そして講堂へ行き、入学式が始まる。

「えー、であるからして」校長の話が10分程度続き、それが終わると

「新入生代表挨拶。新入生代表　翠蓮寺　曜子」はい。と元気の良い声が講堂内に響く。

そして壇上に立った少女は少し緊張しながら

「本日はこの名門、来龍学園のへ入学できたことを嬉しく思います。その言葉をきっかけに、スピーチを続ける。」

「おい龍人！」

「どうした司？」

「あの子かなり可愛くない？まじ一目惚れだつて」やや興奮ぎみに龍人へ話す。

「まあ確かに可愛いな」しかし、その言葉とは裏腹に表情はあまり冴えない。

スピーチが終わり教頭らしい人が入学式の終わりを告げる。

教室へ帰る途中ふと空を見上げる。そうなるとついつい物思いに耽つてしまう。

「……………る？龍人君？」突然話しかけられ顔を覗き込まれる。

「え、な、何かな？」少し動揺を隠せないまま返事をする。

「だから、このあと暇かなつて聞いてるんだけど……………だめ？」目を潤ませながら消えそうな声で聞いてくるので男としては断れるものではない。

「だ、大丈夫だよ。あ、でも今日はデパート行くつもりだったんだけど……………」少し透華の様子を見ながら一拍おき

「……………一緒にいく？」その一言で、先程までの悲しげな顔人はうつてかわり、満面の笑顔と変わった。

第一章↳入学初日 #4

デパートへと向かう龍人と透華。

龍人は身長が182?

少し長い黒髪にはつちりとした二重の黒眼。俗に言うイケメンである。

一方透華は身長が161?

背中の真ん中まで届くブラウン色の髪に目は少しつり目だがそれが清楚な印象を与える。俗に言う美少女である。

その2人が並んで歩いていると嫌が応でもついつい注目してしまうものだ。

「今日はデパートで何を買うの?」並んで歩きながら疑問に思っていたことを問いかける。

「えーと、食材と、勉強道具を少しかな」行きなり聞かれたので苦笑しながら答える。

龍人は親と一緒に暮らしているが年に数える程度しか家にいないので実質一人暮らしと遜色ないのだ。

「それなら今日、わ、私のところに食べに来ない?」もじもじしながら聞いてくるが

「ごめん。今日はちょっと行くところあるから。」本当に申し訳ないと思う。

しかし、本当に大事なことなのだ。

「そ、それなら仕方ないね。じゃあ、また今度食べに来てね」

「ああ。遠慮なく行かせてもらっ」実はこう言った少し気が利くところが気に入っていたりする。

買い物が終わり時刻は12時半。

「もう昼だな。どっか食べに行くか？」実は先程からずっと空腹だったのだ。

「そだね。じゃあどこにする？」

「いいところ知ってるよ。行く？」

「うん。龍人君に任せるよ」それから歩くこと2分デパート内にある店へと入る。

マルシェ・デ・ボリ

変わった名前の店だ。

「いらっしやい。おー、龍人じゃないか。久しぶりだな」

「お久しぶりです。清次さん」適当なところ座ってくれと言われ、窓際の席をとる。

「注文は？」一応料理店なので注文をとる。

龍人はラーメン

透華はナポリタンを頼む。

「龍人君？知り合いみたいだけどあの人誰？」変な目で見られる。

「あの人は親父の弟。僕の叔父さんに当たる人だよ」包み隠さず
べて話していると料理が届く。

「それにしても、龍人でかくなつたな。しかも女連れと来たもんだ」
茶化すように清次が喋る。

「清次さんも相変わらずですね。なんか懐かしいです」不意に遠く
を見つめる龍人。そして眼が少し潤む。

「まあゆっくりしてけよ」優しい口調でいきなり言われたので透華
は少し戸惑ったが、ありがとうございますと清次にお礼を言う。

そして食べ終わり2人は会計を済ませ帰路へつく。

第一章　入学初日　#5

2人は2人だけの時間を噛み締めるように無言のまま帰る。
いつのまにか龍人の家の前まできていた。

「……それじゃ。……また明日」静寂を破るように龍人が切り出す
が透華は無言のまま俯いたままだ。

「今日……あそこいくんでしょ？」

「……ああ……まあね」再び2人の間に静寂が訪れる。
しかし、思わぬ形でその静寂は崩れる。

「あらあら、2人でデートかしら？」何故か嬉しそうな声をあげて
いる人の方を見る。

「か、母さん？何でここに？」

「失礼ね。今日はなんの日か忘れたの？」何をいつているかはわか
っている。

「もう少ししたらいこうと思ってたよ。だから気にしないでいいよ」
今日は倉木家にとって大事な日であった。

第一章　入学初日　#6

　　6年前　　

「父さん、母さんいつてらっしゃい」今日は龍人の両親の結婚記念日であった。そのため、今日は夫婦水入らずで遠出することになっていた。

「いい子にしてるんだぞ」それだけ言うと父さんは僕の頭を優しく撫でる。

「大丈夫だよ。今日は司君の家に行くから」

「そう？それじゃいつてくるわね」龍人の両親は家を出ていく。

10時、龍人は司の家へと向かう。

「司君いますか？」家のチャイムを押し、司の親に聞く。

「いるわよ。入ってらっしゃい」司の母親はとても優しい人で、龍人のことも自分の息子のようにたまに扱ってしまうのだ。

「司？龍人君遊びに来たわよ」

「龍人、早く来いよ。もう少しで倒せそうだから」この時、司はゲームをしていた。

仲の良い人といるときとは不思議なもので、あまり遊んだ気がしな

くても別れの時間はすぐ来てしまうものだ。

「それじゃ、お邪魔しました」礼儀正しく司の母親に挨拶をすると家をでる。

現在の時刻は午後5時。

龍人は一人で家まで帰っていた。
歩くこと数分、自宅に到着した。

「龍人！どこいったの？」

「お姉ちゃん？どうしたのそんなにあわてて？」この時龍人の姉はひどく混乱していた。

「落ち着いて聞いてね龍人。」言い聞かせるようにゆっくりと龍人に話す。

「……お父さんが……死んじやったんだって……」え？死ぬ？死んだ？姉の眼は真っ赤になっており、地面に崩れていた。

「お、お姉ちゃん……う、うそだよね？」まだ幼い龍人には話が掴めていなかった。

第一章　入学初日　#7

龍人の父親は厳格であつたが家族サービスはしっかりとするなど、家庭的な一面を持っていた。

「お、お母さんはどうなったの？…もしかしてお母さんも…？」
父親の死はまだ幼い龍人にとって心を崩壊するには十分であつたが、それに加え母親まで亡くしては、もはや龍人もただではすむまい。

「お母さんは大丈夫。お父さんは信号無視をしたトラックに…」
うう…とまだ泣いている。
しかし、何故か龍人はいくら悲しくても涙は出なかった。

～ 一週間後 ～

葬式が静かに執り行われる。

「龍人。私もうダメかもしれない。あの人がいないと…」父親が亡くなつてからというものの母親は毎日のように泣いていた。

「お母さん…」やはりとても悲しい気分だ。
だがしかし、涙は出ない。

やがて葬式が終わり、龍人はいつものように学校に通う。

そして今に至る。

第一章　入学初日　#8

　　～ 現在 ～

「あれからもう6年か、早いな」この6年で色々なことが変化した。母親が再婚したり

姉とは音信不通になったりと色々なことが…。

「あの子は来てないの？全く父親をなんだと思ってるのかしら」少しため息混じりに愚痴を漏らす。

「それにしても、透華ちゃんはずっかり綺麗になったわね」近くまでいき、まじまじと透華を見る。

「あ、あの…。わ、私帰ります」それだけ言うと一礼して走っていった。

「それじゃ、いきますか。ね、龍人？」花買っていけないとと補足を加え、親子は歩き出す。

父親が眠る墓に向かって

第一章↳入学初日 #8↳（後書き）

これで入学初日の話しは終了となります。

長々とすいませんでした。この作品がはじめての執筆となるので至らぬ点多々あると思いますがどうか暖かい目で見ていただければ嬉しいです。

また、希望・要望があればどんどん仰って欲しいとおもいます。

これをもって入学初日の後書きとさせていただきます。

第二章↳恋の行方は #1

「……君…て…さい」

「龍人君、起きてください！」なんか二回目だな。と、龍人はデジヤブを感じながら、優しい女の声に包まれながら起きる。

「…おはよう…。眠い…」実は昨日、母親が父親のことを思いだし2時までその相手をしていたのだ。

「ダメですよ！朝食出来てるので早く来てくださいね」こうしていると何故か新婚夫婦みたいで良いなと思いつながらベッドから出る。着替えをし、顔を洗うとリビングへ行く。

「早く食べないと遅刻しますよ」少し怒ったような口調であったが、なぜか可愛いと感じてしまう龍人であった。

……ふと時計を確認してみる。
8:00、8時。

「あと30分か。余裕だな」家から学校までは10分足らずでつくのであまり焦らない。
それから5分後…

「よし行くか透華」明るく話しかけるとちょっと待ってと言われる。

「はい、これ」手渡されたのは愛妻弁当…違うか。幼馴染み弁当であつた。

小さいときからずっと料理をしてきた透華の料理はとても美味しく、

称賛に値するほどである。

「あ、ありがとう……。じゃ、行きますか」再度同じことをしゃべると、今度は透華も明るく頷いてくれた。

第二章　恋の行方は　#2

家を出ると、司が家の前でしゃがみこんで待っていた。

「遅いぞ龍人」少々怒った口調で出迎える。

「悪いな。あんまり昨日眠れなくて」苦笑いして説明すると無愛想にあつそと返されてしまった。今日は学校2日目である。

「早くいつて友達100人作ろーぜ」などいいながら

友達100人できるかな♪と歌っているのを見た透華と龍人は呆れた視線を送り、アイコンタクトで合図し司をおいて歩き出す。

「お、おい！まってよ！置いていかないでくれー」走って追いかけてくるので、少し意地悪したくなり暫しの間逃げ続けたが、透華の体力が続かずすぐに終わってしまった。

そんなことをしていると学校に着いていた。

「以外と早くついたね」少し息の上がついていた透華に歩を合わせながら玄関まで歩く。

靴を履き替えようと龍人が下駄箱を開けると…

「な、なにこれ…ラ、ラブレター？」

「え？…嘘だよな」ゆつくりと自分に言い聞かせるように話していると後ろから声が聞こえる。幻聴だろうか？

「龍人の裏切り者ー！」いきなり後ろから首を絞められる。

「お前だけは…お前だけは仲間だと思ってたのに！」司の腕をふり
ばどき軽く咳払いをする。

「うるせえな…わかったよ。今ここで2人にも見せればいいんだろ
？」そういうとラブレター？を開く

「 拝啓龍人様。

入学式の時に一度拝見してから私の心に衝撃が走りました。
できれば一度ゆっくりとお話したいとおもいます。放課後暇でし
たら理科準備室に来てください。お待ちしています。

敬具？？？

」

第二章　恋の行方は　#3

ラブレターと言うだけで固まっていたのに、さらにあの内容である。内容を見た3人は無言のままさらに固まる。静寂を破るように透華が喋りだす。

「…放課後…り、理科準備室に行くの？」まさかこの場面で聞かれると思っていなかった龍人は考え込む。

「……授業中に考える。答えが出たら教える。それでいいか？」そう言われると返事をしにくい、ただ2人は頷く。

「…それじゃ、教室行くか」重い空気を払拭するかのように明るく龍人は振る舞うが、透華の、透華だけの表情が冴えない。

「（龍人君、行くのかな？行ってほしくないな）」

「行くぞ透華」急に声をかけられ驚いた表情をしながら仕方なく龍人たちのところまで歩いていく。

入学式の次の日と言うのは大抵どこも同じで自己紹介やクラス委員などを決めるのである。

「それじゃ、昨日も自己紹介したと思うが俺の名前は佐々木晃治だ。よろしくなみんな」担任が自己紹介をすると拍手が起こる。

「じゃ、名簿一番から自己紹介だな。青木一発目だぞ。張り切っ
け」

「青木です。」

順調に自己紹介が進み次は龍人の番である。

「倉木龍人です。よろしくお願いします。」できるだけ笑顔で自己紹介をすると拍手喝采である。主に女子から。次に透華である。

「桜山透華です。よろしくお願いします。」またしても拍手喝采である。主に男子から。

最後に司の番である。

「山中司です。美少女の皆さんよろしくお願いします。僕と付き合ってください」クラス中が凍りつく。

「う、嘘だよ！みんな普通によろしくな」と訂正するがもはやそれは手遅れであった。司が席についてからもクラスの空気は一向によくなかった。

しかし、その静寂は断ち切られる。

第二章↳恋の行方は #4↳

「す、すいません。遅れました」いきなり前の扉が勢いよく開かれる。

「すいません佐々木先生。少し道に迷ってしまつて…」

「じ、じゃあ、倉木先生。挨拶お願いします」気を取り直して…みたいな顔をして自己紹介をさせる。

おい…嘘だろ……

「倉木千尋です。今日からこのクラスの副担任として頑張るのでよろしくお願いします」

長い黒髪にぱつちりとした目。そして、モデルのようなスタイル。俗に言う美人だ。

「姉さん……」龍人は頭を抱える。何を隠そう、倉木千尋は倉木龍人の実の姉なのである。

「あ、龍人。今日からよろしくね。それから久しぶりに家に住もうと思うんだけど。いいよね？」爆弾発言だ。

「龍人てめー！また俺を裏切るのか！」司のその一言を皮切りにクラス中のみんなに質問攻めに遭う。

「ああああああああ！うるさい！」いきなり龍人がキレたのでまたクラスを静寂が包む。

「あれは、僕の姉さん。実の姉。関係はそれだけ…以上だ。異論のあるものは？」龍人の豹変ぶりにみんながただただ頷くしかなかった。だが、空気の読めないものが一名いた。

「り、りゅうちゃん、あれは遊びだったのね？」いきなり泣き真似を始める。

「龍人てめー！」「うるさい！」「…」

「それだけじゃなかった。あいつは異常なまでのブラコンだ」冷めた口調で悪態をつく。

第二章　恋の行方は　#5

はじめてマジギレをした幼馴染みを見た透華は啞然としていたが数秒してから苦笑いをしていた。

「千尋さん、まだ龍人から離れないんだ」

「あ、透華ちゃん。元気にしてた？それにしても綺麗になったね。でもりゅうちゃんは私のだからね」あげないぞーと可愛らしく喋るが透華の顔は少しひきつっている。

「…倉木先生。いい加減にしてください。この話しは後でじっくりと話せばいいでしょう。だからHRを続けさせてください」全くもつての正論を言われた千尋が黙り込んだのでクラス内も静かになる。

「え、えーと…じゃあクラス委員を決めたいので立候補者は挙手をお願いします」当然のごとく自ら進んでてをあげるものなどいない…はずだった。

一人を除き……

「はい。私がやります」そう威勢よく手をあげたのは白い肌に少し茶色がかった髪の子であった。

「えーと…名前…なんだっけ？」先生は先程の衝撃のせいで少し頭が混乱しているようだった。

「森野凜花ですよ。先生」

「あ、ああ。森野か。それ以外に立候補者はいるか？」クラスを見

渡すが手をあげるものなど誰もいなかった。

「それじゃ、森野。あとは任せた」その人との凜花は教卓に立ち、委員を次々と決めていく。

そして数分後すべて終わり、残りの時間をだらだらとすごし午前の授業が終了した。

第二章　恋の行方は　#6

「おい龍人！昼、食堂行かね？」今はつかの間の休息が許される昼休み。

「いや、弁当あるから教室で食べるよ」今日の朝渡された手作り弁当が…

ふいに教室の扉が開かれ開いた一人の女が龍人に近づき抱擁する。

「龍君久しぶり」。元気にしてた？」突然の来訪にクラス中のみんなが声を失いたただただその中心を見つめる。

「紗絵さん、いきなり抱きつくのまだ直らないんですか？」抱きつかれた本人はあきれた顔で冷静な対処をする。

山本紗絵。来龍学園の生徒会会長にして学年首席。容姿端麗、といった完璧超人である。

「龍君。何で私に会いに来てくれないの？あれは遊びだったの？」いきなり泣き出したが我関せずといった感じで無視を決め込んでみると、少し赤い顔で叩いてきた。

「なんか反応してよ。は、恥ずかしいじゃない」だったらしないでくださいよと苦笑ぎみに注意をするが紗絵の暴走は止まることを知らなかった。

「お、おい龍人。何で生徒会長と抱き合ってたんだよ」口をわなわなと震わせている司がみんなの疑問を代表して龍人に問いかける。

「紗絵さんとは幼馴染みみたいなものだから気にするな」至って普

通に話しているが透華は何やら先程からぶつぶつと呟いている。

「何で龍人君の周りには美人ばかり集まるのかな…私だって負けてられないし頑張らないと…」透華の意気込みを知るよしもない龍人は紗絵と楽しそうに話をしている。

「龍人君！放課後のことは決めたの？」

「あつ、喋るの忘れてた。僕、放課後行くことにしたから」また龍人との溝が開いた気がした透華だった。

第二章　恋の行方は　#7

昼食を終えた龍人に眠気が急に襲いかかり必死に堪えようとするが、耐えきれず意識を手放す。

体が唐突に揺れ動くのに従い、脳も同土に揺れる。

「起きろ龍人！もう放課後だぞ。　たく何時間寝ればいいんだよ…」
あきれたような顔と声で龍人を起こしたのは司であった。

「早く起きろつて。理科準備室いくんだろ？」忘れていた。今日の放課後はラブレターに書いていた通り理科準備室へいく予定であった。

「あれ？透華は？」教室の中を一望するが龍人と司以外の人間は存在せず、2人の会話が教室中にこだまする。

「帰ったよ。なんか泣きそうな顔してたな」しみじみと思い出すような仕草をしながら喋る司に対し龍人は、苦笑いを返すだけであった。

理科準備室。

そこは薬品と標本が織り成す独特の世界。

意を決した龍人はノックをし理科準備室の扉を開く。そこには昨日、新入生代表として講堂の壇上に上がっていた翠蓮寺　曜子であった。

「結構遅かったですね。帰ったのかと思いましたよ。でも、来てくれてありがとうございます」礼儀正しくきつちりと45°に曲げられた背筋についついこちらも返さなくてはならない気がした龍人は急いで礼を返す。

少しの重たい空気が理科準備室を支配する。

「いや、いいよ。気にしないで。それで、話って何？」突如として話を切り出した龍人に対し、微笑みを返す。

第二章↳恋の行方は #8↳

「もう、わかってるくせに…」頬を赤く染め、少しずつ龍人に詰め寄る。しかし龍人もそれに合わせるように少しずつ後退する。

「僕に告白したいってことでいいのかな？それとも何かの宗教へのお誘い？」おどけた風に話ながら探りをいれる。

「前者の方かな。それでお答えを聞かせてもらえる？」自分からは告白しようとはせず、答えを伺うが龍人は黙りを決め込み曜子を少しにらみ重たい口を開く。

「ごめん。君とは付き合えないよ…」それは否定の言葉、拒否する言葉。2人の間に重い重い沈黙が続く。それは何時間にも感じられた。

「じゃあ他に好きな人がいるってこと？」突然に話しかけられ、ビクツとしたがそれを隠すように言葉を返す。

「それは違う。誰も好きじゃないから、好きな人がいないから断るんだよ」あくまで冷静に、心の動揺を悟られないように静かに話す。そして、自分に言い聞かせるように、自分の心に問いかけるように…。

「あなたは私と付き合うことで、自分に好意を寄せている人が傷つかないために断るの？それとも、ただ本当に好きな人がいないから？」曜子は自分が否定されるとは思っていなかったのか語気を荒げ次から次へと質問を浴びせる。

「何で？何で私じゃダメなの？理由を、理由を教えなさいよ！」最後には泣きながら大声をあげている。まるで駄々をこねる子供のよう
うに。

それをみた龍人は静かに歩みより頭を撫で、ゆっくりと言い聞かせるように話しかける。

第二章↳恋の行方は #9↳

「君と付き合わないのは、怖いからなんだ…。僕のせいで他の人が傷つくのが無性に怖いんだ…。だから、だからわかって欲しい…。本当にごめんね……。」「自分の心からの本音を他人に打ち明けたのはこれが初めてだった。そしてこれがきっかけで龍人の悪夢は始まりの金を鳴り響かせることとなった。

好きな人がいない…

それを聞いていた一人の女生徒がこの事を次の日にクラス中の…。いや、学年中に広めてしまったことで僕の日常は音をたてて崩れ去っていった。

第二章↳恋の行方は #9↳（後書き）

第二章完結しました!!

ご愛読いただき誠にありがとうございます（^・^）（・・）（
——）

次章もしっかりと更新していきたいと思えます。

皆様のアクセス数やPV、感想などが私の力となります。

これからもご愛顧のほどどうかよろしくお願いしますm（——）m

第三章　崩壊する日常　#1

あれから1週間

何度断つても告白があとをたたない。

「あ、あの…つ、付き合ってください！」これで合計14回目だ。今日だけで言うなら2回目…正直もううんざりだ。

いつそのこと彼女を作ってしまったのか…

いやそれはダメだ。自分から彼女はまだ必要ないみたいなのを言つたのに作るのは矛盾している。

頭の中で会議を開いていると先ほどの人が顔を赤らめて返事は？と聞いてくる。勿論答えはNOである。

告白をしてきた人の顔を見ると今にも泣きそうな顔でこっちを見てくる。…正直卑怯であると思いつつも心も鬼にし切り捨てる。

これで計15回このような顔を見たことになる。断っておきながらも心が痛む。

そして再び脳内サミットを再開する。

天使「彼女たちが可哀想です。せめてあなたに彼女がいれば…」

悪魔「告白してきたやつと付き合って飽きたら捨てればいいんだよ！」

天使「それだけはダメです。彼女たちの勇気を踏みにじるつもりですか？ここは一旦彼女もどきを作るべきです」

僕は一瞬迷う。

悪魔「そりゃ名案だ。そうしろよ俺！」

天使と悪魔は意見が一致したようだが僕は迷う。

そして天使と悪魔の提案を受け入れることにした。

第三章　崩壊する日常　#2

そうと決まれば善は急げである。

候補としては

桜山　透華

翠蓮寺　曜子

山本　紗絵

の以上3人である。

しかし翠蓮寺　曜子は告白を断ったばかりなので消滅。山本　紗絵はスーパースタッフ会長で、非公認ではあるがファンクラブまであるので消滅。

と、いうことで残った透華が選択された。

そしてその日の放課後3日ぶりに2人でならんで歩いて帰る。

「な、なあ透華…頼みがあるんだけどいいかな？」少し驚いた顔をしながら何？と聞いてくる。

「あ、あのさ…」深呼吸をし、そして意を決しことの顛末を説明する。

「最近ずっと告白が絶えないんだ。だから……」

「だから？」

僕と……こ、恋人のふりをして欲しいんだ」

透華は固まり、動かなくなってしまう口をパクパクさせている。

「あ、あの……それって…どういう…」かなり混乱しているようで言葉を出すにも四苦八苦していてとても会話をできる状態には見えない。

「だからね、沢山の人からの告白を避けるには彼女がいればいいと思っただけだから……」ようやく自分が言いたかったことを素直にしゃべったお陰で透華も落ち着きを取り戻し胸に手を当てて自分を抑制しながら、ひとつの疑問を投げ掛ける。

「何で私を選んだの？紗絵さんだっていたし…それにこの前ラブレターくれた人だっていたよね？」

「え、えーと……それはだな……あれだよ、透華とは付き合っても長いし、それに……いいやつだから」最後の方は本当に思っていたことなので、満面の笑顔で透華に頼み込む。
顔を見ると赤くなっているが目は笑っていた。

「いいよ。……それで何をすればいいの？」

あっ！なにをするればいいのか考えてなかった……

第三章　崩壊する日常　#3

「ねえ、なにすればいいの？」改めて聞かれるが何も考えていなかった。ありきたりな返事をしながら先のことを考える。

「例えば、いつも一緒に登校してるだろ？そのとき手を繋ぎながら登校とか？」そんなんでいいのか？と心の中で一人突っ込みをする。ふと、第二回脳内サミットを開催する。

天使「いい考えなのではないでしょうか？しかしそれではいささかインパクトが足りない気がします」

悪魔「俺に名案がある。それは……昼休みに、はい、あーん。をすることだ。その後は透華が俺（龍人）の膝の上で過ごせば万事OKだ」天使「それはやりすぎなのでは？私なら手を繋ぎながらではなく、腕を絡ませて登校とかがいいと思います」いつもながらはつきりと意見を喋る天使と悪魔に感謝しながら脳内サミットを閉会する。このじかん僅か12秒。

「後は学校にいつてからなんとかしようよ。それから……ありがとう透華……」またしても顔を見る。いや、顔を覗き込む。すると顔を逸らされるが笑っているようなので安心する。

　　次の日　　

「さあいよいよだな……」横にいる人物に話しかけ、先に手を握る。透華はまだ恥ずかしいようで、顔を赤くしているようだ。それでも可愛いので気にならない。

そして2人ならんで教室の扉を開く。みんなの視線がかなりいたい。特に男子からの。

「お、おい龍人…お前透華ちゃんに何をした！てめーあの清純な透華ちゃんを返せー」何故か憤慨している司を軽く無視しながら並んで席につくと後ろの人が話しかけてくる。

「あ、あの龍人さん…透華さんとは付き合ってるんですか？」期待通りの反応をしてくれたのに嬉しい反面、透華に申し訳ないという気持ちで心が痛む。

「そうだよ、鉄さん。なんか変なところあるかな？とりあえず昨日から付き合ってることになってるんだけど…」（鉄さんは第一章を参照してください）

「変なところなんてないよ。お似合いだと思います」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8986z/>

僕の日常

2012年1月4日03時48分発行